様式５

平成２６年　３月　２６日

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（５年計画の4年度目）

１．研究課題

（和文）トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究-物語からモニュメントまで

（英文）Trans-disciplinary Studies of Organizing Traumatic Experiences and Memories: From Narratives to Monuments

２．研究代表者

（氏名）　田中雅一

３．研究期間

平成　２２年　４月　から　平成　２７年　３月　まで

４．研究目的（400字程度）

トラウマの原因は、幼児のころの虐待、家庭内暴力、学校でのいじめ、暴力行為、とくに戦争での経験、犯罪や事故、自然災害などである。本研究では、トラウマをより広い意味で苦悩（suffering)や痛み(pain)とみなす。この苦悩にたいし人びとがどのような形で対峙し、克服しようとしてきたかについて考えてみたい。この過程をここでは組織化と表現する。トラウマは一般に心理学や精神医学が対象とする問題領域であるが、組織化という過程はこれらの領域にとどまるものではない。広く、カウンセリングを含む医療、芸術、宗教、司法、メディア、コミュニケーションなどの分野における研究と実践領域にまたがる。トラウマやPTSDなどの医療用語が、日常的に使われるようになって久しい。心理学や精神医学用語が普及していった理由は、わたしたちの世界が脱神学化してきたことを意味している。そのような状況でトラウマについてあえて考察することは、現代日本社会の分析にも貢献することになろう。

５．本年度の研究実施状況（400字程度）

今年は、「日常と暴力」「セクシュアリティ」「震災と原発」「モニュメント・追悼」「沖縄戦＜後＞の社会とトラウマ」「植民地と民族差別」「マイノリティの苦悩と記憶」「トラウマと文学」などのテーマで集中的な議論を重ねた。また国際ワークショップを5月と11月の2回開催した。どちらも本研究会の成果を公開する機会になっただけでなく、これからの研究方向を考える上でも重要な会議であった。

６．研究成果の概要（400字程度）

今年は、研究会発足四年目であり、これまで十分に議論されていなかった主題についてゲストスピーカーを招聘し、国内ワークショップや国際ワークショップを組織することで、集中的に理解を深めるように心がけた。公開シンポの他にも追悼や文学などのテーマで研究会を開催した。他方で、論文集の成果を公刊するために、すでに議論を重ねているテーマ（たとえば少数民族）についての研究会を開催し、さらなる知識の深化と問題意識の共有に務めた。

７．共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

5月18日(土)国際ワークショップ「東アジアにおけるセクシュアリティ・トラウマ・社会苦悩」 報告者　Seo Okja,茶園敏美,Yu Ding, Sun,Mei-Hua Chen, A.S.DiStefano, Stevi Jackson,
5月25日（月）ワークショップ「震災と原発」報告者 猪瀬浩平,谷山洋三,井上リサ
7月6日（土）ワークショップ「沖縄戦＜後＞の社会とトラウマ：報告者 北村毅,當山冨士子,蟻塚亮二
11月10日（日）国際ワークショップ「戦争・トラウマ・アート」報告者 Rupert Cox, Angus Carlyle, 平松幸三,Ana Carden-Coyne,　福浦厚子,井上リサ

８．本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区　　分	機関数	受入人数			延べ人数		
			外国人	大学院生		外国人	大学院生
学内（法人内）	6	26	3	10	240	20	86
国立大学	8	10		2	70		10
公立大学	1	1			6		
私立大学	13	16	1		90	5	
大学共同利用機関法人	1	1			6		
独立行政法人等公的研究機関	1	1			12		
民間機関	1	1			8		
外国機関	7	7	7		7	7	
その他							
計	38	63	11	12	439	32	96

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。
※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。
※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。
（例）・１つの共同利用・共同研究課題で２人を共同研究員として３日間受け入れた（参加した場合）：参加人数２人、延べ人数６人

９．本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数
（参加研究者がファーストオーサーであるものを対象）

論文数	4	
うち国際学術誌に掲載された論文数	（　　）	（ 1 ）

※下段の（　）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

（注）分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割			
論文数			
	うち国際学術誌に 掲載された論文数	（　　）	（　　）

※下段の（　）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

※　高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※　拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

（注）インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由			
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名